

知的障害児のための療育活動（キッズサークル、サマースクール）

事業代表者：宇都宮大学教育学部 教授 池本喜代正

1. 事業の目的・意義

1) 事業の意義

子どもにとって放課後は、家庭・学校以外の「第3の活動の場」と言われ、子どもの発達や人間関係形成に重要な役割を果たすものである。近年、障害児のための学童保育の重要性が認識され、宇都宮市においても障害児学童保育の整備が図られつつある。しかし、現在においても放課後や土日あるいは長期休暇において保護者（特に母親）が面倒を見ており、家庭でゲームやテレビで時間を過ごすものが多い実情である。そのような障害児にとって十分な活動の場を提供するとともに、ボランティアとして参加する学生にとっても「学びの場」とするために本事業は、これまで12年間継続して実施してきた。

2) 事業の目的

知的障害児の発達を支援するために、①楽しみながら体を十分に動かす、②集団への適応性を高め、注意力・集中力を育て、認知面の発達を促すことを目的としている。また、学生にとっては障害のある子どもと実際に関わることを通して子どもの特性を把握し対応方法を学ぶことを目的としている。

2. 事業内容

本事業は、毎月第4土曜日13:30~15:30に実施するキッズサークルと8月に4日間実施するサマースクールからなっている。

(1) キッズサークル（知的障害児療育活動）

キッズサークル（以下、キッズ）は、月1回宇都宮大学第2体育館にて開催しており、2012年度のキッズの活動は、以下の通りである。

1) 参加者数

キッズの対象は、知的障害のある児童であるが、中学生になっても参加するものが多く、今年度参加登録をしているものは、小学生42名、中学生12名、高校生1名の55名である。全員、特別支援学級あるいは特別支援学校の在籍者である。

月ごとの参加者数を、表1に示す。

表1 月別の児童生徒参加人数

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
人数	51	39	47	33	55	41	45	49	44	44	63
人	人	人	人	人	人	人	人	名	名	名	名

一方、ボランティアとして参加している学生は毎月20~25名程度であり、教員も数名参加している。なお、3月の参加者数が多いのは、新たな参加希望者も参加したためである。

2) 内容

全員でリズムカルな音楽に合わせて集団の大きな流れに沿って、歩く・走る・止まる・手つなぎ歩行などの動きを行うダイナミック・リズム、ボランティア学生による音楽演奏やペープサートなどを見たり聴いたりする集会、みんなで一緒に楽しむダンスやゲーム等によって構成されている。

進行の中心となっているのは特別支援教育専攻の3年生であり、毎回事前に集まり、集会やゲームなどの内容・担当を決めたり、ペープサートなどの教材を作成したり、ダンスの振り付けを考えたり、演奏の練習をするなどの準備を行っている。知的障害児や自閉症児の特性を考えて、教材作成を行っており、音楽や視覚的な教材を多く取り入れている。また、自閉症児は予定変更が苦手であるため、あらかじめスケジュールを視覚的に提示して、プログラムが終了するとそのカードを抜き取り、進行状況を示すようにしている（図1 参照）



図1 スケジュールカード

当日は、8つのグループごとに、学生担当（グループ・リーダー）が配置され、各内容の担当者リーダーが順序よく交代しながら全体指示を出して進行している。主な活動内容は、ダイナミックリズム、集会（パネルシアター、手遊び歌、ハンドベル、動作模倣など）、リトミック、ゲーム、ダンスで構成されている。

障害が重く、多くの支援が必要な子どもに関しては個別的な支援を行うようにしている。主な活動の様子を写真で示す（図2、3）



図2 集会で、ペープサートを見る子どもたち



図3 ダイナミックリズムでの活動

参加する子ども達は当然保護者の付き添いで通ってくるわけであるが、保護者は子ども達の活動を見学することも自由であるが、キッズの裏番組として「保護者プログラム」として月ごとにテーマを設けて話し合いや学習会を行っている。講師としては、大学教員、小学校教員（特別支援学級担任）、元養護学校教員、福祉関係者など多様である。

(2) サマースクール

1) ねらい

長期休業中（夏休み）に、知的障害児のためのサマースクールを開催し、知的障害児に対する療育的活動を中心としたコミュニケーション能力・集団参加能力などを育成する。ボランティア参加の学生は、障害児と直接触れ合うことを通して、障害児に対する指導のあり方を学ぶ。

2) 期日： 2012年8月10日(金)～12日(月)

3) 参加者

今年度の参加者は、小学生26名、中学生7名の計33名であった（全員4日間参加）。

ボランティアは59名（社会人9、院生4、大学生56、高校生1）であり、4日間参加の者が多いが、1～3日間参加の者もいる。学生は、特別支援教育専攻の学生・院生が中心であるが、他学科の教育学部学生や農学部・工学部の学生、そして国際医療福祉大や自治医大など他大学の学生も参加している。

4) 内容

サマースクールは、宇都宮市教育委員会の後援を得て、宇都宮市城山地区市民センターを会場に実施している。

内容としては、1日目・2日目の午前中は、朝の会、ダイナミック・リズムやゲームなどを行って体を動かし、午後は小物入れ作り、貼り絵などの制作活動を行った。

3日目は、宇都宮市森林公園に行き、体力別に8グループに分けて活動を行った。コースも古賀志山コース、富士見峠コース、チャレンジコースなど子どもに合わせた設定をしている。グループごとに現地にて昼食を食べて、午後はダンス練習などを行った。

4日目は、午前中カレーライスとサラダなどの調理活

動を行った。こちらも子どもの能力や生活年齢に合わせて活動内容を変えており、子どもの実態に即した活動となっている。

午後は、練習してきたダンスや自分たちで作った小物入れを保護者に発表したり、手品ショーを見るなどのお別れ会、そして閉校式があった。



図4 制作の様子



図5 古賀志山でのハイキング



図6 終わりの会での様子



図7 最終日、ボランティアの記念撮影

3. 事業の成果

キッズサークルは、大学における知的障害児の療育活動であり、障害のある子どもたちにとって楽しく安全に活動できる貴重な機会であることは言うまでもない。そして毎回参加することで、子どもたち自身も流れを理解し、見通しを持って活動に参加でき、集団としてのまとまりができるという変容が見られている。

ボランティアとして参加している学生にとっては、子どもの前で自分達の作成した教材を提示したり、手遊び歌などをしたり、子どもたちに働きかけるという教師的な活動となっており、「教師としての実践力養成の場」であるといえる。この活動に参加している学生は、教員志向が高く、過去において教員になった者の割合が非常に高いことが指摘できる。サマースクールは、キッズサークルの拡大版であるが、マンツーマンで子どもに学生がつき、障害のある子どもと一日を通して一緒に活動することによって障害児教育への関心も高くなるという結果が出ている。

キッズサークルとサマースクールは、特別支援教育専攻の学生を中心に12年間継続してきた活動であり、ボランティア活動に関心がある学生が障害児の特性や子どもとの関わり方を学ぶ有効な機会である。指導技術、運営・企画の仕方も下の学生が上の学生から学び、引き継がれており、年々レベルアップしている。もちろん活動の主体である障害のある子どもたちにとっても、このような手厚い指導の下で体を動かすという活動は他に類を見ない活動であり、子ども達も喜んで参加しているとともに保護者からも非常に意義深い活動であると高く評価されている。

4. 今後の展望

新年度（2013年度）も、事業を継続しているが、参加希望者が非常に多く、現在参加を待ってもらっている子どもたちが10名程度いるのが現状である。ボランティアの確保が、大きな課題である。だが、作新学院大学や東洋大学など新たな学生が参加するなどボランティアの広がりも見られる。

なお、近年の参加者の特徴として、比較的高機能である自閉症スペクトラム障害の児童の割合が増えていることが指摘できる。また一方で、障害種・程度が多様化してきている。

子どもたちの実態・特性に応じた活動内容・支援方法についてボランティア学生とともに検討していきたい。